

就労・母親世代の一般女性の乳がんに対する認識およびその検診の受診行動に影響する要因

田中 登美¹⁾ 森島千都子²⁾

¹⁾奈良県立医科大学医学部看護学科 ²⁾同志社女子大学看護学部看護学科

The perception of breast cancer and the factors influencing behavior of breast cancer screening
in the women of the working and/or mother

Tomi Tanaka, PhD, CNS¹⁾ Chizuko Morishima, MS, RN²⁾

¹⁾Nara Medical University ²⁾Doshisha Women's College of Liberal Arts

要旨

【目的】就労・母親世代の一般女性の乳がんに対する認識およびその検診の受診行動に影響する要因を明らかにした。【方法】一般女性を対象としてインタビューを行い、逐語録を作成して意味内容の類似性に従い分類した。【結果】対象者10名は24～36(平均年齢32.3)歳。乳がんに対する認識として、治る病気を自分で見つけることができること、身近な存在の人のがん体験を通してがんのことについて興味をもつことなどが明らかになった。検診受診行動の阻害要因として授乳、情報不足など、促進要因として費用の補助、必要性を実感することがわかった。【考察】検診の利点を認識して定期的に受診行動がとれていた場合においても、妊娠、出産、授乳などのライフイベントで乳がん検診を中断してしまったり、費用や情報不足が受診行動を阻害していた。乳がん検診の啓発活動における課題は、検診による安心感、がん体験者との交流、費用の補助、具体的な情報収集方法などを考慮することが考えられた。

Abstract

Purpose: The purpose of this study was the perception of breast cancer and the factors influencing behavior of breast cancer screening. **Method:** Interviews were conducted for women, and verbatim transcripts were prepared and classified according to semantic content similarity. **Results:** 10 women were between 24 to 36 years old (average age, 32.3). Regarding perception of breast cancer, it was clear that it was possible for people to be influenced by having been cured of a disease, and to be interested in cancer through the cancer experience of people close to them. It was found to be necessary to subsidize expenses as a promoting factor, and lack of information were identified as obstacles in the behavior of medical examinations. **Conclusions:** Even if medical examination were regular and the benefits of them were recognized, or interrupted by life events such as pregnancy, childbirth, the lactation, cost and lack of information affected medical examination behavior. Problem in breast cancer screening awareness-raising activities included the need to consider security during examination, interacting with people with the cancer experience, cost subsidies, and the specific information collection method.

キーワード: 就労・母親世代の一般女性, 乳がん, 乳がんに対する認識, 乳がん検診, 受診行動

Key words: women of the working and/or mother. breast cancer, perception of breast cancer, breast cancer screening, behavior of breast cancer screening

I. 緒言

1981年以來、がんは死亡原因の第1位で、2018年には373,584名と増加し続けている。我が国のがん政策は、1964年「対がん10か年総合戦略」に始まり、がん病態の解明、早期発見・早期治療に取り組んできた。2006年には「がん対策推進基本計画」が立案され、「がん登録」を義務化したことにより、現在、毎年約98万人が「がん」と診断されており、3人に1人が「がん」で亡くなることを報告するに至っている。

日本人女性の乳がんは、罹患数96,381人(2015年)と年々増加しており、その罹患率は最も高く、年齢別では30歳代から増加し、40歳代後半～50歳代前半にピークを迎え、その後は次第に減少する。日本人の乳がん罹患率は、欧米より若干若い(20～39歳の罹患数は5,700人(約6%)という特徴があり、若いときから自分の乳房に関心をもつことが大切であると考えられる。また乳がんの10年相対生存率は79.3%で、早期乳がんでは、適切な治療を受けることで治癒することが可能であることから、数年前より乳がん検診啓発を行っているが、乳がんの検診受診率は36.4%で、欧米が70～80%に対し、極めて低い実情がある。

がん検診に関する研究を概観してみると、そのほとんどががん検診率および要精密検査対象者の受診率などの実態報告である。

看護研究では子宮頸がん検診に関するものが多く、子宮頸がん検診の受診に関するプロセス・受診を阻害する因子、受診行動に関する個別介入研究がある。乳がん検診に関するものでは、女子大学生・看護学生・看護職女性を対象にした乳がん検診に対する認識と行動(日下他;2011、的場他;2017)、子育て期の女性・乳がん体験者を対象とした乳がん検診の受診の意識・受診を促進する要点(林他;2015)、乳がん患者を対象とした乳がん検診受療行動の促進要因と促進因子(小林他 2006)がある。しかし、就労者を対象とした看護研究は、胃がん検診に関する認識・行

動や影響要因のみである。

つまり、日本の乳がん患者は就労・母親世代である30歳代から増加するにもかかわらず、就労・母親世代の一般女性を対象にした看護研究、乳がん検診に関する認識や受診行動に影響する要因をテーマにした看護研究は見当たらなかった。

II. 研究目的

乳がん罹患好発年齢である就労世代、母親世代の一般女性を対象にした乳がんに対する認識および乳がん検診の受診行動に影響する要因を明らかにする。

III. 用語の定義

就労・母親世代の一般女性:

乳がん罹患好発年齢である就労世代、母親世代の一般女性のこと、本研究においては20歳～40歳までの日本人女性とした。ただし、乳がん罹患して治療中、乳がん治療が終了した乳がんサバイバーは除外した。

受診行動:

定期的に乳房セルフケアチェックを行ったり、乳がん検診を受けたりというような乳がんの早期発見に関する予防行動をとることとした。さらに検診を受けて要精密結果が出た場合には、速やかに医療機関に受診するような行動をとることとした。

IV. 方法

1. 研究デザイン

因子探索型の質的記述的研究。

2. 対象者

近畿に在住する20歳～40歳までの日本人一般女性で、研究参加の同意が得られたもの。

3. 調査期間

2018年12月～2019年3月。

4. データ収集方法

1) 半構造化インタビュー

調査内容は、乳がんに対する認識、乳がん検診の受診行動に影響する要因とした。全対象者の了承が得られICレコーダーに録音し

表1 対象者の背景

対象者	年齢	最終学歴	乳がん検診の経験回数 (最終検診時期など)	同居家族	仕事の有無・内容
A	30代前半	大学	なし	夫、子ども(幼児)	なし:出産を契機に退職 (元常勤 事務)
B	20代後半	大学	1回 5年前(市町村の検診)	なし	あり:派遣(接客)
C	30代後半	大学	3回 10年前(市町村の検診)	夫、子ども(幼児)	なし:出産を契機に退職 (元常勤 事務)
D	30代前半	大学	なし	夫、子ども(乳児)	あり:育休中(常勤 事務)
E	30代前半	高等学校	なし	父、母	あり:常勤(事務)
F	30代前半	高等学校	なし	父、母	あり:常勤(美容師)
G	30代前半	大学	6回 毎年(夫の職場の検診)	夫、子ども(幼児)2人	なし:結婚を契機に退職 (元常勤 販売)
H	20代前半	大学	なし	父、母	あり:常勤(事務)
I	30代前半	大学	1回 2年前(市町村の検診)	父、母	あり:派遣(事務)
J	30代前半	大学	なし	なし	あり:常勤(介護士)

た。得られたデータは、逐語録とし、不明確な部分は、研究対象者にその意味内容を確認した。

2) 記録・聞き取り調査

研究対象者の背景(年齢、乳がん検診を受けた回数や時期とその結果、家族背景など)について情報収集を行った。

5. 分析方法

質的帰納的分析。逐語録から文章を意味単位ごとに取り出し、コードを付与し、類似性と相違性により分類し、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化を行った。質的研究経験および臨床経験豊富なメンバーで分析を行い、真実性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

対象者には、本研究への参加についての自由意思を尊重すること、プライバシーの保護、データの厳重な管理について説明した。またインタビューの中で語りたくないことは語らなくていいということを説明し、文書で同意を得た。インタビューは対象者の都合の良い日時、場所を設定した。なお、研究者の所属機関での倫理審査委員会での承認(兵庫医

療大学倫理審査委員会第 18017 号)を経て研究を実施した。

V. 結果

1. 対象者の背景(表1)

対象者10名は、24～36(平均年齢32.3)歳で、最終学歴は大学が8名と高等学校が2名であった。6名は乳がん検診を一度も受けたことがなかったが、夫の職場の検診を定期的に毎年受けている者が1名いた。既婚者は4名で夫と乳幼児と同居していた。未婚者は6名で、そのうち両親と同居が4名、2名が独居であった。就労者は6名いたが、結婚や出産を契機に退職した者が3名と育児休暇中である者が1名おり、就労を中断していた。

2. 乳がんに対する認識(表2)

対象者の乳がんに対する認識は、【乳がんは、乳房を失うことにはなるが治る病気であり、自分で見つけることができる】【複雑な治療を受けても奏効するとは限らず、乳がんは命にかかわることもある】【乳がんは自分に身近な病気で、身近な存在の人のがん体験を通して

表2 乳がんに関する認識

カテゴリー	サブカテゴリー
乳がんは、乳房を失うことにはなるが治る病気であり、自分で見つけることができる	乳がんは治る病気
	乳がんは早期発見で治る病気
	乳がんは乳房全摘すれば治る病気
	乳がんは他のがんより死なない
	乳がんになると乳房を失う
	早期乳がんでも乳房を失う
	乳房を切除してしまうと今後の授乳ができるのか心配
	乳がんを早期発見できれば、乳房を残せる可能性がある
	乳がんのしこりは自分で見つけることができる
	乳がんは命にかかわる病気で、命を失うこともありうる可能性の高い病気
複雑な治療を受けても奏効するとは限らず、乳がんは命にかかわることもある	乳がんを完治するのは無理だが、治療はできる
	若いと乳がんの進行が早く命にかかわる
	乳がんが進行したら転移する
	乳がんは治療をしても結果、命を失うこともありうる病気
	乳がんの治療方法は選択肢が多くて自分が受ける治療について悩むだろう
	予防的乳房切除の話は聞いたが、その必要性に関しては疑問を持っている
	乳がんは年齢に関係なく、自分と同じ女性が罹患する確率が高い
	乳がんは男女ともに罹患する
	芸能人、友人の乳がん体験から、乳がんを身近に感じた
	職場の先輩が胸にしこりがあるからマンモグラフィーを受けた話を聞いて、自分のおっぱいにしこりできてないかなと考えておっぱい触った
乳がんは自分に身近な病気で、身近な存在の人のがん体験を通してがんのことに興味をもつ	母ががん家系なので、がん家系のひとと乳がん検診の経験談をお互いに話して恐らく自分も年齢が上がるとがんが出てくると覚悟している
	母親が子宮がんになったので、乳がんの話には結構聞き入る
	以前受けた乳がん検診結果が要精査になったとき、同じ結果がでた友人と話して乳がんを身近に感じた
	友だちががんになったときがんについて深く調べて理解しようとした
	好きな芸能人のがんの罹患や死亡ニュースについては夫と話題にする
	夫とは乳がん検診の予定や結果に関する話をする
	芸能人のがんの罹患や死亡ニュースを知れば、ネットサーフィンをして詳しく調べる
	40歳代の職場の先輩とは乳がんのことは心配なので話題になる
	妊娠・出産経験のない人が乳がんになりやすいので自分は大丈夫と思っている
	乳がんになったときに考えたい
乳がんは自分にとって身近な病気ではなく、話題にしたり、調べたりすることがない	乳がんは年齢の高い人がなるので自分にとっては身近には感じない
	乳がんは中年の30代や40代、高齢の50代や60代ぐらいの人が多くて、若い人は少ないので、自分には関係ない
	乳がんになりやすいかどうかは、年齢や生活習慣によって異なるが自分は大丈夫だと思ふ
	乳がんは身近な病気ではないので、職場の同年代のひととの話題にはならない
	乳がんはしんどくならないので授乳していても病気とあまりつながらないので、ママ友とは話題にならない
	女性特有の乳がんのことは、男性がいたりすると恥ずかしいしあまり話題にしない
	男性の前では乳がんのことは話題にしない
	病気の話は個人の内側の話になるので、同年代の友人とじゃ一般的になかなか話題にしにくい
	乳がんの知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしない
	乳がんの知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしない
乳がんは高額な治療費がかかり、備えが必要	乳がん治療には多額の費用がかかる
	がん家系なので、がん保険に加入して治療費の準備をしている

表3-1 乳がん検診の受診行動を阻害する要因

阻害要因	カテゴリー	サブカテゴリー
授乳	授乳中なので乳がん検診を受けることができない	行かないとなという気持ちはあるが、1日2回授乳をしているので乳がん検診を受けることができない 断乳して時間がたないと乳がん検診を受けることができないので先延ばししている 今は授乳中なので乳がん検診を受けることができないが、断乳したら受けてみるつもり
時間がない	時間がないので乳がん検診を受けていない	職員健康診断を受けて、また乳がん検診となると時間が要る 病院に乳がん検診を受けに行く時間があまりない 今は子育てで時間がないが、近くの役所でやったら行こうと思う
自分は年齢的に早い	乳がん検診は30歳代後半～40歳代に受けるもので自分は年齢的に早い	乳がん検診は30歳代後半に受けるイメージがあり、自分は年齢的に早い 40歳代にならないと乳がん検診の通知が来ないので自分は年齢的に早い 市政だよりで情報を得るが、乳がん検診は自分は年齢的に早い 20歳代で乳がん検診を受けに行ったとき、40歳代以上の人が多く同じ年代の人は少なかった 乳がん検診の連絡が来たので行ったが、自分よりも年齢が上ばかり 乳がん検診は年齢の高い人しか受けられない 今の私の年代(30歳代前半)では乳がん検診は受けることができない 乳がん検診は大事だとは思いますが、まだ自分は20歳代なんで受けなくてよい 乳がんは結構年齢の高い人がなるというイメージで身近ではないので受けない 乳がん検診が会社の1年に2回の人間ドックのオプションでできる年代になったら受ける
痛いので怖い	乳がん検診は痛いのので怖く受けたくない	乳がん検診は痛いと感じることは受けたくない マンモグラフィーを受けたとき、痛くて痛くて、もう二度とやるもんかと思った 初めてマンモグラフィーを受けたときの衝撃がまだ印象に残り怖い マンモグラフィー時の痛みはだんだん軽くなると思って受ける 乳がん検診の痛さと恥ずかしさと怖さ、得体の知れないしこりがあるっていうのが怖かった
しこりを見つけると不安	自己検診でしこりを見つけると不安になるのではない	自己検診でしこりを見つけると不安になるのではない
恥ずかしい	乳がん検診に関する情報は少ないが、イメージがつくため恥ずかしく怖い	若い人の場合、婦人科病院に入ることを躊躇する 婦人科クリニックとかはちょっと負担 婦人科クリニックに足を踏み入れるまで不安。 情報があまりなく、乳がん検診のイメージがつくから余計恥ずかしいし怖い
情報不足	乳がん検診に関する情報が少ないので受けることができない	乳がん検診の情報がわからないので受けることができない 乳がん検診の受けることのできる場所や頻度の情報が少ないので受けることができていない 乳がん検診を受けたいが、検診のできる病院、手続きいう具体的な情報がはつきりわからない
	乳がん検診のできる病院を探すのも情報がなく困った	乳がん検診の専門の病院があり受けたが、ない場合どこで受ければいいのかわからない 病院を探すのも情報がなくちょっと大変だった
きっかけがない	乳がん検診の情報が少なく方法がわからない	自己検診の情報が少ない 情報がなく、乳がん自己検診はしてない。 自己検診の方法がわからない
	乳がん検診のお知らせがなくきっかけがない	子宮頸がんの無料の検診に行ったという話はするが、乳がんの無料検診はないので話は全然しない 乳がん検診のきっかけがない 子宮頸がんと同様、市のお知らせのような形で送られてきたら身近に感じる 友だちづたいに乳がん検診案内が来ることを知り、自分にもダイレクトメッセージが来たら受ける 乳がん検診の対象外なのでお知らせの案内が自分には来ないので、具体的な情報がないし、受けるかどうかを考えることもない 子宮がん検診はハガキ来るので、どこの病院行った？という話はあるが、乳がんはハガキが来ないので今まで友達との会話では出ない
必要性を感じない	乳がん検診の必要性を感じないので受けたくない	周りも乳がん検診を受けていないので自分も受けない 仕事が忙しいので乳がん検診の優先度が低い 日々の仕事で手一杯みたいな感じで乳がん検診を受けるという心が薄い しこりがないので乳がん検診の必要はない 特に乳房に違和感がないので調べるという発想がない 不調を自覚しないと乳がん検診は受けない 乳がんの症状が出れば検診に行く 乳がんに意識があまり向いておらず、何か結構まあいいやんと思う 健康に関しては結構疎く受けていない
	乳がん自己検診のメリットを実感できない	乳がん自己検診でがんが分かるのは難しいと思う 今は特にお乳をあげておっぱい張ってるから分りにくい 乳房が大きい人は見つけにくいという話を聞くので乳房自己検診はしてない
費用が高い	乳がん検診費用の情報が少なく、高額なら受けることをためらう	乳がん検診費用が気になる 費用が気になるが乳がん検診は受けたいといけない 乳がん検診は保健施設外で費用が気になり受けたくない お金の問題は結構大きく、仮にマンモグラフィーとエコーに5万も6万もかかるのなら受けるのを悩む 乳がん検診の費用や助成の情報が少ない 乳がん検診の費用が分からない

表3-2 乳がん検診の受診行動を促進する要因

促進要因	カテゴリー	サブカテゴリー
費用の補助	乳がん検診費用を一部助成もしくは無料にできれば受ける	乳がん検診費用を一部助成もしくは無料にできれば受ける
		マンモグラフィとエコーが1万～5,000円で受けられるならその費用払ってでも受ける意味はある 乳がん検診は夫の健康保険で無料で受けられる
安心できる	乳がん検診を受けることでがんがないことを確認でき安心できる	1年に2回、乳がん検診は受けてるという安心感
		乳がん陰性の検査結果で安心が得られる
		乳がん検診を受けて、しこりが良性と確認できて安堵の気持ちを経験した
		乳がん検診を受けて安心が得られ自己検診を始めた
検診をきっかけに自己検診もするようになる		乳がんはすぐ気になるので自己検診はしたほうがいい
		乳がん検診の時に方法を教えてもらって入浴中にする 生理の時に乳房が張るので自己を検診する ブラジャーを付けたときに触る
母親・夫の勧めや友だち間の会話で乳がん検診は必要と思う		母親から勧められて乳がん検診を受けた
		30歳を超えて親に勧められて行った
		結婚直後に夫から乳がん検診を勧められて続いている
年齢的に必要なので乳がん検診を受ける		友だちとおして調べておいたほうがいいということになり乳がん検診を受けようと思う
		年齢的に仕方ない、検査はしないといけないと思いながら受けた
		乳がん検診無料チケットが送ってくる年齢になるとリスクが上がるので受ける
必要性を実感	乳がんは若い人の病気なので乳がん検診は受けたい	今、若い子でも乳がんだと聞いており、検診の年齢を引き下げると受けたいと思っている人がいる
		テレビの報道で乳がんは若い人の病気という認識を持ち、乳がん検診は受けられる限りは受けたい
乳がん検診で早期発見すると早期に治療できるし、乳房を残せる		乳がん検診では自分で気が付かないがんもわかる 何かあったときも、乳がん検診で早期に見つけてもらえたんだからっていうポジティブな考え方ができる
		乳がん検診を受けるとがんを早期に見つけて治療できるメリット
		がんを早く見つけるとおっぱい残すことができるので乳がん検診を受けることに意味がある
乳がん検診を受けたことで定期的に受ける意識が固まる		乳がん検診を8回受けて定期的に受ける意識が固まった
		初めて受けた乳がん検診で良性と診断され、定期的に検診を受ける意識が固まる
強制的に勧められる	会社から受けるように指示されると受ける	会社から受けるように指示されると受けるが、自分で受診場所を調べて行くという行動はできてない 自分の職場にも強制的な会社の乳がん検診があれば行く
情報	さまざまな方法で乳がん検診に関する情報をもっと欲しい	市からの個人あてのハガキ通知が欲しい
		ダイレクトに年代ごとの自分に合う情報が欲しい
		区報・市報による情報が欲しい
		SNS、ウェブの広告、ツイッター・フェイスブックでアカウントを作る
		市からの情報がとれるアプリ
		乳がんのドラマをテレビですると乳がん検診も受けようと思う

がんのことについて興味をもつ【乳がんは自分にとって身近な病気ではなく、話題にしたり、調べたりすることがない】【乳がんの知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしない】【乳がんは高額な治療費がかかり、備えが必要】の6カテゴリーが抽出された。

乳がんに対する認識は、乳房を失うことにはなるが治る病気、自分で見つけることができる病気ととらえていた。また、乳がんには複雑な治療を受けることを理解し、命にかかわることも覚悟していた。

(斜め文字は、対象者のことば)

・早く見つけられれば、そんなに死亡率が高いが

んでもないのかなって…

・山田邦子さんのことを聞いてて、乳がんって自分でがんがわかることがあるんだっていうのと、それで対処できるんだっていうので、それでちよっとびっくりしたような記憶

・早く見つけたら完治もするし、乳房全摘出みたいなの…しなくても済むって聞いたことある

・若くてなってる人もいるので…がんは、やっぱり進行が若いと早いイメージが…命に関わるっていうか…

・麻央さんのことで、結構若い人もなるんやなっていうのを知ったので、自分も結構人ごとじゃないんだっていうのは、それは感じました。

さらに、身近な存在の人のがん体験を通して興味をもつこともわかった。

・母ががん家系なので、がん家系の人と乳がん検診の経験談を話して、恐らく自分も年齢が上がるとがんが出てくると覚悟している

・職場の先輩が、胸にしこりがあるからマンモグラフィーを受けた話を聴いて、自分のおっぱいにかしこりできてないかなと考えておっぱい触った

しかし、乳がんを身近に感じていない場合、乳がんのことを話題にしたり、調べたりすることがなかった。

・温泉とか行ったときとかに、50代60代の人が、片方のお乳がもうなかったりとか、結構見るので、年齢高い人とかは結構なってる人が多いかな。怖くてあんまり見れなかった

・北斗さん、自分とだいぶ年齢も違うし、やっぱり年齢の高い人がなる病気っていう感じ…だから、私はまだ大丈夫やろうという…何か安易な考えが…

・子宮(がん)なら生理痛しんどいねんとか、そういうところから、検診に行ったほうがいいよとか、病院に行ったほうがいいんちゃう？とか…、生理からの子宮系の病気みたいな話にはなるんですけど…乳がんの話になると、あまりそこは話が出ない

・乳がんはしんどいとかもないから、授乳していても病気とあまりつながらないので、ママ友での話題にならないかな

また、乳がんの知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしないこと、乳がんは高額な治療費がかかるので備えが必要とらえていた。

・知識としては乳がんのことは欲しい。知らへん過ぎて他人ごとやし、もしかしたら自分もなるかもしれないと思うけど、でも、身近さはないから、自分で調べたり…ということもしない

・がんになったときに、やっぱり多額の医療費がかかってくる…、やっぱそういうところで、自分も何とかしないといけないのかなっていう意識が変わりました。だから、そのときに初めて、生命保険、自分に掛けようとかっていう認識が変わりました

3. 乳がん検診の受診行動に影響する要因

対象者の乳がん検診に関する認識のうち受診行動を阻害する要因(表3-1)は、【授乳】【時間がない】【自分は年齢的に早い】【痛いので怖い】【しこりを見つけると怖い】【恥ずかしい】【情報不足】【きっかけがない】【必要性を感じない】【費用が高い】の10カテゴリーだった。

また対象者の乳がん検診に関する認識のうち受診行動を促進する要因(表3-2)は、【費用の補助】【安心できる】【必要性を実感】【強制的に勧められる】【情報】の5カテゴリーが抽出された。

阻害要因【授乳】として、以下のようなことが語られた。

・行かないという気持ちはあるが、1日2回授乳をしているので乳がん検診を受けられない

・断乳して時間がたたないと乳がん検診を受けることができないので先延ばしにしている

阻害要因【時間がない】として、以下のようなことが語られた。

・職員健康診断を受けて、また乳がん検診となると時間が要るからちよつと無理

・今は子育てで時間がないし預けるところがない…近くの役所とかでやってたら行こうと思う

阻害要因【痛いので怖い】として、以下のようなことが語られた。

・乳がん検査は痛いと聞いていて、積極的には受けたくない気持ち

・初めてマンモ(グラフィ)を受けたときの衝撃…痛みがまだ印象に残り怖い

阻害要因【情報不足】として、以下のようなことが語られた。

・乳がん検診の受けることができる場所や頻度の情報が少ないので受けれていない

・乳がん検診を受けたいけど、検診のできる病院、手続きいう具体的な情報がはっきりわからない

阻害要因【必要性を感じない】として、以下のようなことが語られた。

- ・乳がん検診は(年齢が)もっと上の人…40歳代になつたら受けるもので自分はまだ早い
- ・周りの子…誰も乳がん検診を受けていないって聞くので自分も受けない
- ・仕事が忙しいので乳がん検診の優先度が低い

促進要因【費用の補助】として、以下のようなことが語られた。

- ・やっぱり私はお金が気になるかな。ある程度、助成してもらえたり、それこそ無料やったら行きます
- ・乳がん検診、夫の健康保険とか使って無料で受けられるなら受けることができる

促進要因【安心できる】として、以下のようなことが語られた。

- ・1年に2回、自分は乳がん検診、受けてるよっていうことが安心感
- ・前に乳がん検診を受けて、しこりが良性と確認できるっていう経験して…安堵の気持ちももてる
- ・乳がん検診を受けて何ともなかった…それで安心できて、自分にできること…自己検診を始めることにした

促進要因【必要性を実感】として、以下のようなことが語られた。

- ・今は若い子でも乳がんになるって聞いて、検診の年齢を引き下げたら受けたいと思っている人いっぱいいると思う
- ・何かあったときも、乳がん検診で早めに見つけてもらえたんやっというポジティブな考え方
- ・がんを早く見つけるとおっぱい残すことができるから検診を受けることに意味がある

促進因子【情報】として、以下のようなことが語られた。

- ・ダイレクトに年代ごと…それと自分に合うもん、お知らせハガキとか…そんな情報が欲しい
- ・SNS、ウェブの広告、ツイッター・フェイスブック…とかアカウントを作って欲しいし、乳がん検診のアプリとかあったらいい

・乳がんのドラマをテレビでするとそれで乳がん検診も受けようと思う

VI. 考察

1. 乳がんに対する認識について

乳がんに対する認識は、乳房を失うことにはなるが治る病気で、自分で見つけることができる病気ととらえていた。また対象者は、身近な存在の人のがん体験を通して興味をもつが、乳がんを身近に感じていない場合、乳がんのことを話題にしたり、知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしないことがわかった。

対象者の「治る病気」「自分で見つけることができる病気」という認識は、乳がんは検診によって早期発見されることで治療により治癒が可能になるがんであることを理解していると推測された。青年後期の看護女子学生は、乳がんを自分で見つけることができ、その方法としてマンモグラフィーにより早期に発見できるととらえているという報告(日下、2011)と一致していた。

就労・母親世代の一般女性である対象者は、身近な存在の人のがん体験を通して興味をもつが、乳がんに関する健康問題を自分のこととしてとらえていない状況も持っていることが伺えた。このことは、乳がんの罹患数は30歳代から増加し、40歳代後半～50歳代前半にピークを迎えることと関係していると考えられた。現在マスコミ報道を通じて、乳がん患者やサバイバーの存在を知ることができ、自分たちの年代にとって乳がんは身近な健康問題としてとらえることにつながる。

しかしながら、本研究の対象者は、就労をしていたり、手のかかる乳幼児を養育する母親であった。この年代の女性は、職場での役割を遂行していること、結婚・妊娠・出産というライフイベントが続くことなどから、多忙でありかつ自分のことよりも家族、特に乳幼児の世話で時間とられる時期とも考えられる。本研究の対象者のうち数名は、出産を契機に離職を経験していたことから、乳がんという健康問

題から一時的に遠ざかった環境で生活していることが予測された。大学生を対象にした看護研究においても同様に乳がんを身近な病気とは捉えていないこと(日下, 2011)が報告されているが、本研究の対象者が置かれて状況は異なると考えられた。乳がん患者を対象にした看護研究において、罹患前は乳がんを自分とは無縁の病気と捉えていることが報告(小林, 2006)されているが、本研究の結果と一致していた。

就労・母親世代の一般女性である対象者は健康な日常生活を送っているがゆえに、乳がんを身近に感じていない場合、乳がんのことを話題にしたり、知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしないと考えられた。この内容は、大学生・乳がん患者を対象にした看護研究においてはこのような結果は報告されていなかった。現在はインターネットなどのSNSからの情報が氾濫しており入手方法も簡易になっている。本研究の対象者もこのような入手手段をもってはいるが、このような一方向での情報ツールの怖さを認知しており、知識は欲しいが、知ると怖くなるので自分で調べたりしないという行動をとっていることも考えられた。

2. 乳がん検診の受診行動に影響する阻害要因・促進要因について

検診受診行動を阻害する要因は、授乳というライフイベントおよび就労のために乳がん検診の時間が十分取れないことや、マンモグラフィーの痛みおよびしこりを見つけると怖いことがわかった。また、情報不足やきっかけがないこと、必要性を感じず費用が高いと感じていた。

検診受診行動を阻害する要因として「授乳というライフイベント」および「就労」のために乳がん検診の時間が十分取れないことは、本研究の対象者の就労者、子育て世代という特徴を示していると考えられた。乳がん患者を対象にした看護研究においても、罹患前は乳がん検診の受診行動を阻害する要因として多忙

が報告(小林, 2006)されているが、本研究結果とも一致していた。

本研究では、検診の利点を認識して定期的に受診行動がとれていた場合でも妊娠、出産、授乳などのライフイベントで中断していることも明らかになったことから、授乳時期の乳房自己検診の情報、断乳後の乳がん検診の時期などの情報を提供する必要性が示唆された。

また、他の看護研究でも報告されている検診受診行動を阻害する要因として「マンモグラフィーの痛み」「しこりを見つけることが怖い」ということが本研究でも明らかになった。乳がんが早期に発見された場合には治療につながる治療を受けることが理解できているが、乳がん検診時の痛みを恐れ、がんが発見されることへの恐怖・不安が潜んでいることが伺える。看護師は、女性はこのような心理的問題を抱えながら乳がん検診を受けていることを理解しながらかかわることが求められていると考えられた。

検診受診行動を促進する要因は、費用の補助、乳がん検診によって得られる安心感、乳がん検診の必要性を実感するような情報が求められていると考えられた。

他の研究においても報告されている「費用の補助」「必要性を実感するような情報」が本研究でも明らかになった。がん対策基本法が施行され十数年が経過し、乳がん検診の必要性が啓発されて久しい。しかしながら、本研究においても同様の結果が得られたことは、行政が行う乳がん検診の対象者が40歳以上であることも起因していると考えられる。大川(2011)は、受診率に対する費用の影響を調査しているが、特に60歳未満にとっては大きく影響することを報告した。本研究の結果とも一致しており、がん検診受診行動を促す方策として、がん検診の費用助成が必要であると考えられる。

就労・母親世代の一般女性は、検診の利点を認識して定期的に受診行動がとれていた

場合においても、この年代特有の妊娠、出産、授乳などのライフイベントにより、乳がん検診の受診行動を中断してしまうこともあり得る。また、乳がん検診に関する情報不足から乳がん検診の必要性を感じることができないために、検診に要する費用が高いと感じるなどの要因が、就労・母親世代の一般女性の乳がん検診受診行動を阻害していた。一方、施策による乳がん検診の費用補助、乳がん検診によって得られる安心感、乳がん検診の必要性を実感するような情報などの要因が、就労・母親世代の一般女性の乳がん検診受診行動を促進していた。時代に合ったツールの活用が今後の乳がん啓発が求められていると考えられた。

したがって、今後の乳がん検診の啓発活動における課題は、検診による安心感、がん体験者との交流、費用の補助、具体的な情報収集方法などを考慮することが考えられた。

本研究の限界と課題

本研究の対象者は、がんに罹患していない一般女性とした。しかし近畿在住に限定した対象者であったため、結果に地域的特性が含まれている可能性があり、一般化には限界がある。一般日本女性の対象者として、リクルート地域を広げること、家族背景である同居者の有無、就労・育児などの有無などが結果に影響を与えることが予測される。今後、多様な情報を加味しながら調査対象を増やし、必要な支援の開発に貢献することが課題である。

謝辞

本研究に協力くださいました対象者の皆様に深く感謝申し上げます。また、本研究は科学研究費助成事業(平成28～30年挑戦的萌芽16K15916)を受けて実施したものである。

なお、第34回日本がん看護学会学術集会にて発表した内容を加筆修正した。

利益相反

開示すべき利益相反はありません。

文献

林直子, 鈴木久美 他(2015):子育て期の女性および乳がん体験者が考える乳がん検診の受診を促進する要点, 保健の科学, 57(8)567-573.

小林志津子, 斎藤繭子 他(2006):日本人女性の乳癌検診受診行動の促進要因と阻害要因の検討, 日乳癌検診学会誌, 15(1)MAR69-74.

国立がん研究センターがん情報サービス
<https://ganjoho.jp/public/index.html> :
2020年7月25日検索.

日下知子, 渡邊有紀(2011):青年後期女性の乳房自己検診行動を妨げる要因—看護学生を対象として—, 川崎医療短期大学紀要, 31, 15-20.

Makoto Kubo et. (2020): Annual report of the Japanese Breast Cancer Society registry for 2016, Breast Cancer, 27, 511-518.

的場久美, 中西伸子(2017):女子大学生の乳がんの早期発見行動を妨げる要因の研究, 奈良看護紀要, 13, 37-47

大川聡子, 根来佐由美 他(2013):乳がん検診・自己触診法の意識を高める啓発活動—年齢差に注目して—, 大阪府立大学看護学部紀要, 19(1)1-10.

鈴木久美, 林直子(2013):成人女性の乳がん及び乳がん検診・自己検診に対する意識調査, 保健の科学, 55(1)63-70.